

# 突然蘇った「婦女子」をめぐるって

遠 藤 織 枝

## は じ め に

1990年8月、イラク軍はクウェートに侵入、一昼夜のうちに支配下におさめてしまった。アメリカ軍が直ちにペルシャ湾を封鎖し一気に緊張が高まった。イラクはその報復として当時イラク、クウェートにいた外国人の身柄を拘束した。

世論の非難を一身に浴びてイラクのフセイン大統領（以下「フ大統領」と略記する）は8月28日それら外国人のうち女性と子供だけを解放すると言明した。

このニュースが伝えられ、その当事者たちが帰国し落ち着くまでの1週間のあいだ「女性と子供」に関する表現が新聞・テレビに飛び交った。その中に「婦女子」という熟語が交っていたことは、意外であり不快であり、時代錯誤を思わせた。

それは、この語が女性と子供を一括りにして一語としているからであり、このことは、女性についての不快な用語を改めようとしている時代の流れと逆行しているからである。

以下、この時代錯誤の用語が実際にどのように使われたかを新聞で追跡し、アンケートによりどう感じられたかを調査した結果を報告する。

## I 新聞の「婦女子」の使用状況

上述のフ大統領の解放声明のニュースが伝えられた8月29日夕刊から、当の女性と子供たちが帰国して落ち着いたことを報じる9月3日夕刊まで、新聞紙上には「女性と子供」「女性、子供」「婦女子」などの表現が繰り返し登場した。ここで、特に違和感をもたらした「婦女子」を中心に、これらの表現がどのように新聞で使われていたかを追跡してみた。新聞は『朝日新聞』（以下『朝日』とする）、『毎日新聞』（以下『毎日』とする）、『日本経済新聞』（以下『日経』とする）、『読賣新聞』（以下『読売』とする）の4紙で、いずれも縮刷版を使用した。

まず、8月29日夕刊であるが、

(1) 「女性と子供は解放へ」(『朝日』トップ5段縦見出し)

(2) 「女性、子供は解放」(『毎日』トップ横見出し)

のような見出しで女性と子供の解放に関するニュースが大きくとりあげられた。しかし、ここではまだ「婦女子」の語は大きい見出しでは使われていない。『朝日』だけが関連記事の中の一段記事の見出しに「婦女子解放／米国は歓迎」として用いている。(下線遠藤、以下同じ)

記事の中では『毎日』が西川特派員の記事として、

「外国人婦女子の解放指示は大統領布告によるもので…(略)／イラクが一方的に併合したクウェート国内にいる約二万一千人の欧米人婦女子にも解放令が適用されるが…

と、2度用いている。しかし4紙全体で5回使われているだけでまだ少ない。

フ大統領の声明文も全文、要旨などで『朝日』『毎日』『読売』は紹介しているが、その中でも「女性、子供」「女性や子供」「女性・子供」のように記されていて「婦女子」の語は使われていない。

この解放された女性と子供たちを一緒にして表現するときの表現のしかたに次のようなものがある。

- a 今回の女性と子どもの解放は高まった西側の怒りを和らげようとする意図がうかがえる。(『朝日』29日夕1面)
- b 在日イラク大使館には29日午前4時ごろ、女性や子供の「人質」解放について連絡があった。(『毎日』29日夕11面)
- c テレックスで「イラク大統領が、出られなくなっていた全外国人の女性、および子供は、(国外へ)出すように決定しました…」(『毎日』29日夕11面)
- d 欧米の女性らもホテルへ戻っている。(『毎日』31日1面)
- e …マンスール・メリア・ホテルに戻された邦人女性たちは…口々にそう明かした。(『読売』31日31面)
- f 女性、子供だけとはいえ、国籍を問わず出国を認めたのは新しい動きといえる。(『日経』29日夕1面)
- g イラク「女性・子供を解放」(『日経』29日夕1面、見出し)

h 女性子供／解放声明（『読売』29日夕2面、見出し）

i 「フ大統領の指示で、婦人と子供は出国を許されることになった」と伝えられ、（『朝日』31日1面）

j イラク政府はこれらの日米欧の婦人、子供のイラク出国は英仏両政府の決断にかかっていると考えていることを強調した。（『読売』1日1面）

k 足止めされていたイタリア人婦女子94人のうち19人が同日、陸路でヨルダン領に入ったことを明らかにした。（同上）

のように11種類の表現方法が用いられている。a～hまでは女性と子供を、助詞、接続詞、コンマ、中点などを使ってまとめて表現しているものである。hは「女性」と「子供」を結びつける語も記号もなしに結びつけられている。この表現は『読売』だけで用いられ、しかも見出しの一部になるときだけ出現している。

i、jは「女性」とせず「婦人」としたもので、最近女性を表すことばとしては避けられるようになった「婦人」が蘇って使われてしまった例で、『朝日』で2例、『毎日』で1例、『読売』で3例使われていた。

kが今回問題にする「婦女子」で、女性と子供を一括して言い表す熟語である。

これら11種が新聞によってどのように使われていたかをまとめる。（表Ⅰ）

これらのうちi、jの「婦人と子供」「婦人、子供」は、表現方法として助詞や記号を用いて結びつけるという点では「女性と子供」などと共通しているが、一方「婦人」という今では自治体なども「女性」に改めてきていることばをもちだしている意識の面では「婦女子」に通じる面をもっている。この二面性と、全体で6例と例も少ないことから、今回全体をみてその数的処理をする際には除外していくことにする。

ここで問題にするのは「婦女子」なので、その他のものは「婦女子」でなくとも同じ意味を伝える表現としての例であり、それらはここで「非婦女子群」ということになる。以下このグループについては「女性～」として一括して指すことにする。なお「女性～」の中の「女性、子供」と「女性・子供」の使われ方の違いとしては、後者——中点によるもの——は見出しで使われるものが多いということが言える。

まず新聞ごとに「婦女子」と「女性～」の使われ方の比をみる。(表Ⅱ)

表Ⅰ 新聞別各表現の使われ方

|              | 『朝日』 | 『毎日』 | 『日経』 | 『読売』 | 計   |
|--------------|------|------|------|------|-----|
| a 女性と子供      | 31   | 23   | 13   | 27   | 94  |
| b 女性や子供      | 14   | 11   | 1    | 2    | 28  |
| c 女性、および子供   | 0    | 1    | 0    | 0    | 1   |
| d 女性ら        | 1    | 6    | 0    | 6    | 13  |
| e 女性たち       | 0    | 3    | 0    | 1    | 4   |
| f 女性、子供      | 15   | 38   | 12   | 26   | 91  |
| g 女性・子供※     | 6③   | 21④  | 1①   | 3③   | 31⑪ |
| h 女性子供       | 0    | 0    | 0    | 4    | 4   |
| a～h 計        | 67   | 103  | 27   | 69   | 266 |
| i 婦人と子供      | 2    | 1    | 0    | 0    | 3   |
| j 婦人、子供      | 0    | 0    | 0    | 3    | 3   |
| k 婦女子        | 18   | 20   | 43   | 41   | 122 |
| 計            | 87   | 124  | 70   | 113  | 394 |
| 合計からijを除いたもの | 85   | 123  | 70   | 110  | 388 |

※ この表現が見出しで使われていた回数を③④などで示した。

表Ⅱ 新聞ごとの「婦女子」と「非婦女子群」

|     | 『朝日』       | 『毎日』        | 『日経』       | 『読売』       |
|-----|------------|-------------|------------|------------|
| 女性～ | 69 (79.3%) | 107 (84.2%) | 29 (38.7%) | 69 (62.7%) |
| 婦女子 | 18 (20.7%) | 20 (15.8%)  | 46 (61.3%) | 41 (37.3%) |
| 計   | 87         | 127         | 75         | 110        |

新聞別では『日経』が「婦女子」を多用していて6割以上もが「婦女子」である。次に『読売』『朝日』『毎日』と続き、『毎日』がいちばん「婦女子」を使っていない。

ここで、かつて新聞に使われた「婦女子」を概観してみる。

戦後の『毎日』の縮刷版の索引で「婦女子」の語の用いられかたを調べると

- 婦女子をタネに45万円詐取（1955. 8. 12）
- 夜道で婦女子を襲う。（1958. 5. 19）
- 白昼少年の通り魔

婦女子ばかり9人襲う。（1959. 4. 21）

など1950年代までにはいくつか「婦女子」を見出しに用いた例が拾えたが、1960年以降毎年ある月を定点としてその月の縮刷版をみたところでは、この語を用いた例は1例も拾えなかった。

今回突然蘇ったと感じたのは、この2、30年間ではこの語を新聞で見かけることがほとんどなかったからなのであろう。

こうした古い表現も、官公庁の形式を重んじる文体、表現の中では使われているのかもしれない、それが今回の大使館、外務省発表大統領の声明の翻訳文の形式ばった用語として蘇ったのかもしれない、とも考えられるので、はたしてその種の特異な用法として「婦女子」が使われているのかどうか使用されている文脈を調べてみる。

- (12) イラクの革命評議会放送（RCC）が「イラク国内にいる外国人婦女子の出国を許可する」と報道したことについて…（『読売』29日1面）
- (13) 外国人婦女子の解放指示は大統領布告によるもので…（『毎日』29日夕1面）
- (14) クウェート国内にいる約21,000人の欧米人婦女子にも解放令が適用されるが…（『毎日』29日夕1面）
- (15) イラク外務省当局は「30日に邦人婦女子の出国手続きを始めた」として該当者リストの提出を求めてきた。（『読売』30日夕1面）
- (16) 解放された邦人婦女子はアンマンで日航救援機に乗り換えて、きょう2日中に帰国の見込みである。（『読売』9月2日3面）

(17) 収容先での待遇について、日本人婦女子の一人は大使館員に「バターや牛乳も豊富にあった」と語ったほか…（『日経』31日1面）

などの文中で使われている。(12)(13)(15)は当局発表の引用などの中で使われているので、公的文章の文脈と合わせているのかともみられるが、一方で、同じ声明を伝えるのに、同じ紙面の同じ記事の中でも

(18) 国営ラジオ、テレビを通じて…イラク、クウェート滞在中のすべての外国人女性と子供の出国を認めることを明らかにした。（『読売』29日夕1面）

と(13)の「婦女子」が必然的でないことを示しているし、(15)に対しては同じニュースを

(19) 出国手続き開始／邦人女性と子供84人のリスト提出へ

…同大使館はイラク側が29日に日本人女性、子供の出国を認めたため、該当する日本人の出国希望者リストをイラク外務省に提出する。（『毎日』30日夕1面）

のように報じ「女性と子供」「女性、子供」と表現している例もあるので「婦女子」でなければいけないことにはならない。

(14)は特派員の署名入りの記事で、特派員自身が「婦女子」を用いた例である。

(16)は社説の中の例で、社説を書いた論説委員自身の選んだ「婦女子」である。

(17)の「日本人婦女子の一人は…語った」とは「日本人婦女子」とそうした女性・子供たちを普通名詞のようにまとめてしまって、当事者にとってはずいぶん失礼な表現をしている。ここはその中の○山△さんとすべきところで、かりに名前を出すのが不都合ならYさんでもAさんでもいい、個人を出す表現をすべき文脈である。つまり(17)は、公式発表の中でも硬質の記事の中でもない、普通の記者の報道記事で使われた例である。

特に公式発表の引用だから固い表現になって「婦女子」が選ばれるということがあるのかもしれないとの推測で調べたが、実際の使われ方はそういう公的な記事の文中に使われるとは限らず——声明文の中でも「女性と子供」が使われる例も多い——記者、論説委員自らが書いた記事の中で使われている例も多く見出された。いったい、30代から50代までの戦後に育ち、生まれた記者たちがどのような感覚でこの語を選んだのか、理解に苦しむところである。

次に見出しをみる。

「女性と子供」「女性・子供」というより「婦女子」の方が短いから、紙面の経済性からこの語が選ばれるのかもしれないとの解釈もできるがそれは全く当たっていなかった。

29日このニュースが大きく報道されたときは4紙とも

②① 女性と子供は解放へ（『朝日』トップ5段縦見出し）

②① 女性、子供は解放（『毎日』トップ横見出し）

②② イラク「女性・子供を解放」（『日経』5段縦見出し）

②③ 女性・子供全員を解放（『読売』トップ横見出し）

のように大きな文字で「女性と子供」「女性・子供」の表現を用いていた。「婦女子」はこの段階では『朝日』の同面の関連記事の中で「婦女子解放／米国は歓迎」と1段見出しで使われていただけである。

それが30日からは見出しにも記事中にも「婦女子」が増えてくる。

見出しでは

②④ イラクの婦女子出国容認（『毎日』30日7面3段見出し）

②⑤ 婦女子らはホテル（『朝日』31日1面トップ5段見出し）

②⑥ 婦女子出国に新条件（『読売』1日1面4段見出し） などである。

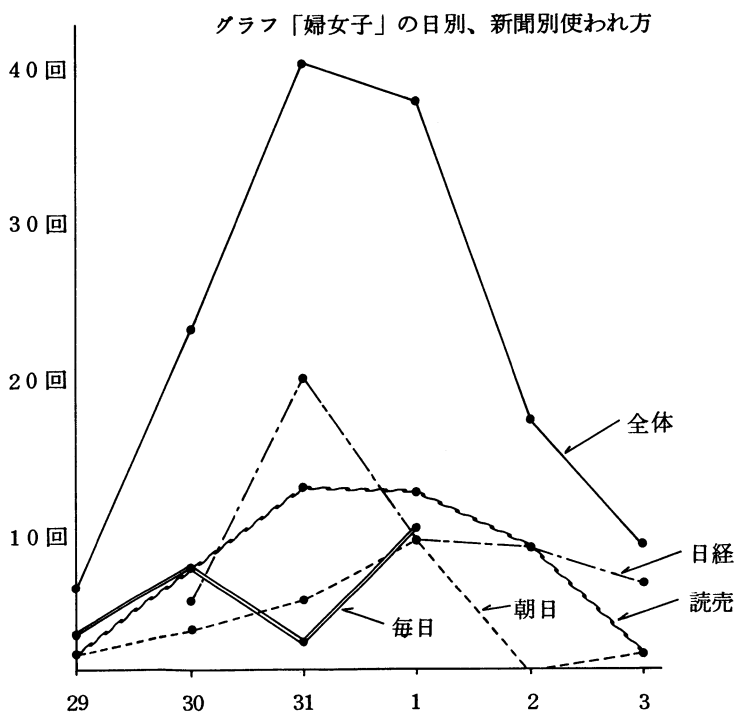
こうした見出しでの使われ方が増え、活字も大きくなることと呼応して記事中でのこの語の使われる回数も増えてくる。記事中での使われ方を日別にする。（表Ⅲ）「婦女子」だけの日別、新聞別使われ方をみたのが表ⅢとグラフⅠである。

表Ⅲ 「婦女子」と「非婦女子群」の日別の使われ方

| 日 付               | 8月29日<br>夕刊   | 8月30日<br>朝・夕刊 | 8月31日<br>朝・夕刊 | 9月1日<br>朝・夕刊  | 9月2日<br>朝刊    | 9月3日<br>朝・夕刊  | 計             |
|-------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 「婦女子」の<br>出 現 回 数 | 5<br>(4.1%)   | 22<br>(18.1%) | 38<br>(31.1%) | 36<br>(29.5%) | 16<br>(10.7%) | 8<br>(6.6%)   | 125<br>(100%) |
| 「女性～」の<br>出 現 回 数 | 60<br>(22.6%) | 19<br>(7.1%)  | 65<br>(22.2%) | 29<br>(10.9%) | 50<br>(18.0%) | 51<br>(19.2%) | 274<br>(100%) |
| 計                 | 65            | 41            | 103           | 65            | 66            | 59            | 399           |

表Ⅳ 「婦女子」の日別、新聞別使われ方

|    | 29日 | 30日 | 31日 | 1日 | 2日 | 3日 |
|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 朝日 | 1   | 3   | 5   | 8  | 0  | 1  |
| 毎日 | 2   | 7   | 2   | 9  | 0  | 0  |
| 日経 | 0   | 5   | 19  | 8  | 8  | 6  |
| 読売 | 2   | 7   | 12  | 11 | 8  | 1  |
| 計  | 5   | 22  | 38  | 36 | 16 | 8  |



31日、1日が記事量が多く、「女性～」も「婦女子」も出現回数が増えるのだが、その増え方と「婦女子」の増え方とは一致せず、「婦女子」だけが急に増えまた急激に減っていくことがわかる。

「女性～」が最も多く使われたのは8月29日で次に31日、3日、2日、1日の順



であるが、「婦女子」では最も多く使われたのが31日で次が1日、30日、2日の順になっている。ニュースの大きさにより記事量が異なり、したがってこれらの語の出現回数も31日をピークに凹凸があるが、「婦女子」の増減はその変動とは一致せず山型の曲線を描いている。つまり「婦女子」はこの6日間で徐々に増えて31日でピークに達し、また徐々に減っている。これを新聞別でみると、『読売』でいちばん典型的な山型の曲線を見ることができる。『日経』は29日は1例も使われていないが、31日では19例といちばん急な傾斜を示す山型である。『朝日』『毎日』は1日にピークが来ているが2日、3日で急に減り、『毎日』は2日以後は1例もない。『毎日』は全体としても数は少ないとはいえ、いくつかは使ってきたのがニュースが鎮静下すると同時に時代錯誤の言語使用への反省がうまれたのか、それとも記者たちが違和感を覚えた結果なのか、全く使われなくなったのである。

『日経』以外は「婦女子」は突如浮かび上がって急激に成長し、またすぐ消滅したのであるが、「日経」は消滅しないままにニュースがなくなってしまうから、近い将来に再びこのような女性と子供と一緒に話題になる事態が起こったら「婦女子」は抵抗なく使われる余地を残している。

以上「婦女子」などという実に女性に失礼な語が、30年の眠りからさめて一気に新聞紙上で躍りだした事実をみた。戦後育ちの記者たちが抵抗も違和感もなく使ったという事実、改めて驚き、同時に男性記者たちの（女性記者は署名でみる限りなかった）意識の変らなさに失望を禁じえないでいる。

こうした「婦女子」の跳梁に違和感をもったり不快感を示した人も当然いて、それらの意見も後日の新聞、雑誌に掲載された。

ひとつは9月12日『毎日』夕刊の「視点」というコラムで島田美術館館長島田真佑氏の「婦女子について」（傍点原文）である。そこには次のように書かれている。

…最初は気にもならなかったがほぼ連日、しかも見出しの大文字に接しているうちに、何がなく奇異な感じが生じてくる。筆者ひとりのたわい無い感想かとも疑い、身近の何人かにインタビューを試みた次第。

「カビ臭そう。おばあちゃんが筆筒の底に敷いたままの古新聞みたい」（高校二年生の娘）。「いま一番元気な女性と子供が、何か急にしおらしくなった感

じ。ちょっと気色悪いね」（20代後半のサラリーマンの知人）。「普段使ったらヤバいんじゃない。そんな言葉」（男の大学生）。「正直いって、嫌ですね。後に軍靴の響きでも聞こえてきそうで」（60歳の女性）。どうもウケがよくない。

擁護派もいる。「懐かしいですなあ。久々に女房や子供達を守ってやらにゃあとといった気になりますよ」（植木職人、65歳）。「非常時の危機感、臨場感が伝わって、よろしい」（知人の退職教師）。

（中略）使用の是非はともかく、1990年唯今の事態を伝えるのに、この婦女子、やはり幾分臺<sup>ど</sup>が立ちすぎているのでは。（ルビ・原文）

また、『朝日ジャーナル』9月21号の「メディア時評」では、天野祐吉氏が以下のように書いている。

「婦女子たァ、なんだ」と、ある女性が怒っていた。イラクから帰ってきた“人質”はたしかに女性と子どもたちである。だからそれをテレビや新聞が「婦女子」と呼んでも、別に間違いではないけれど、「女性と子ども」と言え方がいいところを、なにをことさら「婦女子」なんて言うんだろうか。

あえて言うまでもないけれど、「婦女子」という表現には「おんな子ども」という言い方と同じようなひびきがある。蔑視とは言わぬまでも、男よりは弱い者という、軽視の匂いがあるのはたしかだろう。

なるほど、子どもというのは大人よりも弱い面が多いし、大人よりも先に保護されていい存在である。が、なぜ女性を子どもと同じような弱者として扱うのか。「婦女子たァ、なんだ」と女の人たちが怒るのは、ムリのない話だと、ぼくも思う。

（中略）ま、それが、戦前の人が編集しているような活字メディアに出てきたというのなら、まだ話はわかる。ところが、テレビのなかで、それも“いま”をしっかり呼吸していなければならないハズのニュースキャスターが言うなんて、そのセンスが、ぼくにはとても信じられない（以下略）。

意見の内容はいずれも尤もで何も付け加える必要はないが、この論者のふたりともが男性であることは注目に価する。男性の記者が書いた女性に感ずる不快な

ことばを男性が批判しているのである。

## II 「婦女子」の辞書の記述と、明治期での使われ方

ところで、この「婦女子」の辞書の中での扱いはどうなっているか、その状況を手近の国語辞書、漢和辞書で概観してみる。

明治期の主だった辞書——『言海』（大槻文彦M24）『日本大辞書』（山田美妙、M26）『日本大辞典』（大和田建樹、M29）『國語辞典』（落合直文、M35）——などにはこの語は採録されていない。「婦女」も見られない。

大正8年の『大日本国語辞典』（上田萬年ら）には採録され  
ふぢょし〔婦女子〕 婦女。婦人。女子ども。

又、柔弱なる者。つまらぬ者。

と記述されている。

昭和に入って『大言海』（大槻、S10）は「婦女」は採録し、その語釈の言葉として「婦女子」を用いている。

ふぢょ〔婦女〕 ヲンナ。婦人。女子。婦女子。

同じ年の『辞苑』（新村出）には「婦女」はとりあげられているが、「婦女子」は見出し語にも語釈の言葉にもとり入れられていない。

昭和11年の『大辞典』（下中弥三郎）には「婦女子」がとり入れられ、語釈は『大日本国語辞典』とほとんど変わらない。

それ以後の『言苑』（新村出、S13）『明解国語辞典』（金田一京助、S18）『言林』（新村出、S24）『新編国語辞典』（久松潜一、S27）にはとり上げられていない。

その後『明解国語辞典（改訂版）』（金田一京助、S27）『新選国語辞典』（小学館、S34）あたりからは小型のものにもとり上げられるようになり、以下に並べるような現行のものにはすべて採られている。

『新明解国語辞典第四版』『三省堂国語辞典第三版』『三省堂現代国語辞典』『例解新国語辞典』（以上、三省堂）『新選国語辞典第六版』『現代国語例解辞典』（以上小学館）『新潮国語辞典現代語古典語』『新潮現代国語辞典』（以上新潮社）、『角川新国語辞典』『角川最新国語辞典』（以上、角川書店）、『旺文社

国語辞典』(旺文社)、『学研国語辞典』(学研)、『岩波国語辞典第四版』(岩波書店)などである。これらの語釈は「おんなと子ども」のように「女」と「子ども」の両方をまとめた語として記されている。

以上国語辞典でみるかぎりでは「婦女子」の語は大正年間から辞書に登場するが、どの辞書にもというほどでなかった。どの辞書にも、となるのは昭和になってからである。

漢和辞典ではどうなっているか。

明治期の『漢和大辞典』(重野安繹、M36)には出ていないが、大正期の『大字典』(上田萬年、T6)には「婦女」の追い込みで

婦女子①婦人、女子。②をんな、むすめ。と記されている。『字源』(簡野道明、T12)には独立項目で

婦女子。をんな=婦人、婦子。をんなこども。丈夫に対して柔弱なるつまらぬ者の義とす。

と記されている。以下『新修漢和辞典』(小柳司気太、S7)『詳解漢和大辞典』(服部宇三郎、S13)もほぼ同じ語釈で記されている。

辞書により、「婦人、女子、女とこども」のように言いかえただけのものと、言いかえと「柔弱なる者、つまらぬ者」などと評価を与えた解釈を加えたものとふたとおりある。評価を加えているのは中型以上のもので、小型のものは言いかえているだけである。現行辞書で最も規模の大きい『日本国語大辞典』(小学館、S49)には

ふじょし〔婦女子〕①おんな、婦人、婦女、読本・椿説弓張月「阿公、君を感じて婦女子を儀とす」吾輩は猫である「婦女子を御するは人間の最大難事。

②おんなと子ども(省略)、③柔弱なもののたとえ

のように記されている。③は評価を含むもので、『大日本国語辞典』以来の伝統をうけついでるのであるが、このような語義が生きている以上、この語の、女性を「柔弱なる者、つまらぬ者」との見方も残っているとみられるわけで、だからこそ現在の日本社会で使われるのは適切と言えなくなるのである。

次に明治期のこの語の使われ方を知るため、「女学雑誌」の社説・論説の見出しの索引でこの語を拾ってみた。

そこには

- ① 「婦女子に関する雑誌の世の中」( M 21. 9. 1 )
- ② 「婦女子修身の覚悟 1. 2. 3」( M21. 9. 29、10. 13、10. 27 )
- ③ 「婦女子及び愛国の情」( M22. 9. 14 )
- ④ 「婦女子之友 1. 2」( M22. 9. 28、10. 5 )
- ⑤ 「海外日本婦女子の醜聞」( M24. 5. 16 )

などが挙がっていた。

⑤の論説の本文をみると、目次の題と少し異なり「日本婦女子の醜聞」の題で以下のように書かれている。

…醜業婦女子はただ黄金の多からんことを願ひ、国体の何ものたるかを弁ぜず、かかる類亜の日本婦女、異人の為に節を売る。

されど婦女子は会釈なく海外に出稼ぎし其醜態をさらけ出して日本の道徳斯の如しと吹聴す。…曖昧の婦女子が洋行を…容易すく行はる可らず。一派の婦女子は本来此業に慣れたるものなり。…海外の港々に密淫売する日本婦女子が出来事は反って公けとならず…出稼ぎの徒は無知の婦女子なり。

ここでは「婦女子」の語は一貫して女性の意味で使われており、子どもは含まれていない。

次に『婦女新聞』の論説にこの文字の使われているものをみる。

「韓国の婦女子」と題する論説が明治34年7月の新聞にみられるが、その文中の「婦女子」の語は次のように使われている。

…現今朝鮮の婦女子は全く牢住居の有様なり。最近帰朝者の語る所に依れば、婦女子は今尚依然として一生涯内房陰幽の処に屏居し、未知の男は勿論、既知の者と雖も苟くも男なる限りは出でて之に應對するが如き事毫もなく、客至れば婦人は忽ち鬼にも逢ふたるものの如くひたもの其内房にかくれて客の視線を避け、而もその客を障子屏風の隙間より窺視して得々たるが如し(中略)。韓国婦人の境遇亦憐れならずや。

のような使われ方である。ここでは同じ文章の中で「韓国婦人」の語が使われて

いることからわかるように「婦人」と同義で使われている。つまり、この「婦女子」には子供は含まれず、女性全般だけを指しているのである。

以上のふたつの例は「婦女子」は「女性と子ども」の意ではなく「婦人、女性」だけの意味で明治期に使われていたことを示している。

### Ⅲ アンケートから

では、1990年の今日この語を見たり聞いたりした人々はこれをどう感じたであろうか。大学生157人と社会人90人を対象に簡単なアンケートを試みた。文面は以下のとおりである。以下順にその回答を報告する。

9月初め、イラク、クウェートから女性・子供が帰国したとき、新聞テレビに「婦女子解放」のように「婦女子」という言葉が使われていました。この言葉についてお尋ねします。

1. この言葉に気がつきましたか。(はい、いいえ)
2. 1で「はい」と答えたかたにおたずねします。
  - a 別に気にならなかった。
  - b 古い言葉だとおもった。
  - c 嫌な言葉だと思った。
3. 1で「いいえ」と答えた方も、「はい」と答えた方もお答えください。

この言葉をどう思いますか。

  - a 別に気にならない。
  - b 古くていやなことばだ。
  - c 女性を侮辱した言葉だ。
  - d その他( )

1. 気づいたかどうか

問1では、この語が8、9月に集中して使われたとき、この語に気づいたかどうかを問うたものである。

「はい」と答えた人141人57.1%、「いいえ」106人42.9%で、気がついた人の方が多かった。

問2では、問1で「はい」と答えた人のこの語に対する感じ方をきいた。その結果は、

|   |            |    |        |
|---|------------|----|--------|
| a | 別に気にならなかった | 56 | 39.7 % |
| b | 古い言葉だと思った  | 61 | 43.3 % |
| c | 嫌な言葉だと思った  | 25 | 17.7 % |
| d | その他        | 1  | 0.7 %  |

(複数回答の人もあり合計は10%超える)

で、別に気にならなかった人約40%に対し、古い、嫌なことばだと思った人が約60%いた。

これを大学生と社会人で分けてみると

大学生     a   45.9 %     b   38.8 %     c   15.3 %

社会人     a   30.4 %     b   50.0 %     c   21.4 %

社会人では「気にならない」が30%に対し、b、cの否定的にとらえたもの70%で、社会人の方が否定的な感じ方をした人が多いことを示している。

次に、3で「はい」の人にも「いいえ」の人にも再び、この語の感じ方をきいた。

ここでの全体の回答は以下の通り。

|   |            |      |        |
|---|------------|------|--------|
| a | 別に気にならない   | 109名 | 44.1 % |
| b | 古くて嫌な言葉だ   | 70名  | 28.3 % |
| c | 女性を侮辱した言葉だ | 22名  | 8.9 %  |
| d | その他        | 40名  | 16.2 % |
|   | 無回答        | 10名  | 4.0 %  |

aの「別に気にならない」の容認派とみられる人が約44%で最も多く、以下b、

d、cの順である。ここでの「その他」はすべて批判的なもので、選択肢が簡単すぎて自分の思いが伝わらないと考えて「その他」に記述したと考えられる。つまり、b、c、dはどれもこの語を否定的に感じているのでこれを全部合わせると57.4%で容認派を大きく上回ることになる。

また、同じ回答についても大学生・社会人で分けてみると次のようになる。

|     |         |         |        |         |         |
|-----|---------|---------|--------|---------|---------|
| 大学生 | a 49.7% | b 24.2% | c 8.9% | d 15.9% | NA 2.5% |
| 社会人 | a 34.4% | b 35.6% | c 8.9% | d 16.7% |         |

ここでも社会人の否定的感じ方が強く、「別に気にならない」はbよりも少ない。大学生では逆に「別に気にならない」が「古くて嫌な」と感じる人の2倍以上になっている。

社会人の方がこの語を、古い、嫌なことばととらえている人が多いのは、この語がさかんに使われたとき気がついた人の場合も気がつかなかった人の場合と同じである。

10代、20代の大学生にはかつて使われたころの記憶もなく、全く新しい語としてとつぜん登場したのであるから「別に気にならない」と思うのが半数近くいても当然のことかもしれない。

次にこの回答を男女で分けてみると次のようになる。

|   |         |         |        |         |         |
|---|---------|---------|--------|---------|---------|
| 男 | a 44.1% | b 17.6% | c 2.9% | d 29.4% | NA 8.8% |
| 女 | a 44.1% | b 30.0% | c 9.9% | d 13.6% | NA 3.3% |

「別に気にならない」と答えた率は男女ともほぼ同じであるが、b、c、dはそれぞれ異なり、女性のb、cは男性の2倍以上で、女性の方が切実に不快感をもっていることがわかる。なお、全体の回答者の中で大学生女性が群を抜いて多く、その回答者たちの半数近くがaと答えていたので、それが性別の比率にも大きく影響しているのは当然である。そこで、社会人だけに性別に比べてみる。

|   |         |         |         |         |          |
|---|---------|---------|---------|---------|----------|
| 男 | a 41.7% | b 33.3% | c 0     | d 8.3%  | NA 16.7% |
| 女 | a 33.3% | b 35.9% | c 10.3% | d 17.9% | NA 5.1%  |

社会人の女性だけにすると、容認派がちょうど全体の3分の1で、3分の2が何らかの意味で否定的である。男性は自分のことではないという距離のある見方を



している。

今回のアンケートはごく小規模なもので、設問も選択肢も簡単なものであった。そのことが却って回答者に積極的に補う気を起こさせたのか、dの「その他」に記述してくれた人が全体の16.2%にも及んだ。その記述のほうに回答者の本音がうかがえるものが多かった。以下にその記述を内容別にまとめて紹介する。

A 漠然とした否定的印象を述べたもの

- (1) ちょっとひっかかる(20代男性、20代女性)
- (2) 何かおかしい気がする(20代男性)
- (3) いやな言葉とは思わないが何かひっかかるものがある(20代女性)
- (4) いい言葉だとは思わない(20代男性)
- (5) 語感的に耳にさわる(10代女性)
- (6) 耳ざわりな言葉だ(10代男性)
- (7) いやらしい感じにとれた(10代女性)

B 否定的な意見やその理由を述べているもの

- (8) 女、子供と女性を半人扱いにしている(50代女性)
- (9) 発音が聞きづらいし意味もすぐにはわかりにくい、発音もしにくい(50代女性)
- (10) 今の時代に合わないと思う(40代女性)
- (11) 女性と子供をひとくくりにした意識の上で古い言葉なので現在の女性の存在とずれる(50代女性)
- (12) 女・子供をひとからげにして一段低いものにみている感じ(40代女性)

C 他のことばと合わせて否定的にみているもの。

- (13) 他の言葉があるとよい。「帰国子女」と同じように感じる(20代男)
- (14) 「帰国子女」という言い方と同じような女・子供は弱いものという響きが感じられる(40代女性)
- (15) 「帰国子女」「残留孤児」「女らしい」の方が気になります(30代男)
- (16) 「帰国子女」と同じように非常にひっかかることばだ(50代女性)

D 差別的だということを明らかにしたもの

- (17) 女性は弱い者という差別用語だと思う (10代女性)
  - (18) 侮辱を感じなくもない (50代女性)
  - (19) 男性本能によってできた言葉だ (20代女性)
- E 改めることを提唱しているもの
- (20) 他に使える言葉にすべきだ (20代女性)
  - (21) 古くていやとも思わないが何かもっとよい言葉がないかと思う (60代女性)
  - (22) ことばは社会を反映するのであるから、意識して正しい表現を追求すべきだと思う (50代女性)
  - (23) 民放某局では「女性と子供」という言い方をされていてその方がいいと思った (10代女性)
- F しかたがない、とするもの
- (24) いやだが他に適切な言葉が見つからない (20代女性)
  - (25) 解放されたのは子供だけだからしょうがない (30代男性)
  - (26) ほかに適当な言葉を思いつかなかったのだと思います。仕方がないという感じです (70代女性)

以上のような意見が「その他」に記されていたが、Fの容認派にしても「仕方がない」から認めるという消極的なもので、その他A-Eまでどれも否定的な意見であった。

今回のアンケートは、筆者の身近な大学生、主婦を中心としたもので対象に偏りがありはするが、その人たちの「婦女子」観は、大学生では「気にならない」と「古い、いやだ」とがほぼ同じ比率、社会人では3分の1と3分の2の比率であった。若年層にとっては記憶もないし、また自分のことを言われているという意識も薄い、中年層以上にとっては、古く使われた記憶の残像と重ねる人、また自分の身にひきかえて感じる人などいって拒否的な反応が強かったのだと思う。

## ま と め

今回の「婦女子」は、この語が辞書の記述でも見たような女性を弱いものつまらない者とみる見方が根元にあることばであるところから、今の時代に合わなくなり使われなくなっていたものが突如蘇ったものであった。人質の中の弱い部分から解放して人道的であると見せるフ大統領のジェスチャーがはっきりしている今回の中東の事態だからこそ蘇ったのもあるが、そうだとすると、人権感覚を身につけた記者なら使うのにためらいを感じるはずのことばである。

見出しの場合も、「女性・子供」「女性と子供」などを大きく使った記事もあるのだから、字数を増やさないために「婦女子」を使ったというのも言い訳にすぎなくなる。字数ならほかに調節できるところはいくらでもある。それよりも用語の適切さのほうを優先させるべきである。

戦後育ちの記者たちの、彼ら自身の使用語彙に「婦女子」が含まれていたとも考えにくい。だれか——大使館、外務省あたり——が最初に使ったものを彼らが鵜呑みにしたのかとも思う。しかしそれはそれでまた、ことば使用上の無神経さ無責任さが問われよう。

一方で、ことばの消長についても考えさせられる。女性を蔑みおとしめる表現やことばが、社会の変化や意識の変化によって使われなくなっている、何かのきっかけで生命をふき返すことがあることを今回の「婦女子」は示している。生命をふき返す裏には、それをよしとする意識が存在しているのでもあり、またその蘇ったことばとともに古い否定されていたはずの意識が社会にもどってくることもある。その意味の深さを考える必要がある。

そして、消える以前の事情を知らない世代には抵抗なしに受け入れられる可能性もあることをアンケートからみた。

時代に合わなくなったことばが使われなくなったからといって安心してはいられないことを今回の「婦女子」蘇生劇は教えている。